
疾走する魔法少女なパラベラム-不幸少年奮闘記-

優氣凛々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疾走する魔法少女なパラベラム - 不幸少年奮闘記 -

【Nコード】

N2127BA

【作者名】

優氣凛々

【あらすじ】

《パラベラム》として《乾燥者・デシケーター》と戦った
選択戦争 ……

その後、>サード・プロメテウス・ファイア<によって精神が死亡した佐々木 一兔は…

神様により、「リリカルなのは」の世界に「幸せ」を掴むために送

り込まれた……

これはそんな、不幸に生きた男の子の、幸せを探す物語……

お兄さんの注意書き

これは「魔法少女リリカルなのは」×「疾走する思春期のパラベラム」のクロスオーバー作品です。苦手な方は爆発s(ry……
回れ右をおすすめします……

人物設定

佐々木 ささき 一兔 いつと

年齢：16 9歳

身長：130?

体重：25?

容姿：黒髪短髪で瞳はディープブルー、やせ形だが細マッチョ的、顔は良くもなく悪くもなく普通。

詳細：

《乾燥者・デシケーター》との 選択戦争 の際に「ソード・プロメテウス・ファイア」の起動核となり、精神的に死亡した《パラベラム》。

何故か不幸に遭いやすい体質で「俺の人生、こんなもの」と割りきるまでになった幸薄い男の子。しかし、根は優しく不幸にさえも立ち向かう勇気を持っている。只、鈍感なのは変わらない。不幸を見かねた神様により、「リリカルなのは」の世界に転生を遂げ、「幸せ」になるために頑張る。因みに《パラベラム》としての能力は未だに健在だが、魔力弾も撃てるように神が調整した。

能力：

右手「イド・アームズ：68口径デンジャラス・ラビット」

まるでボウガンのようなデザインの銃。スペシャルショット付の異例なイド・アームズ。スペシャルショットは精神的に干渉して過去のトラウマを書き換えるもの。《パラベラム》なら効果てきめんだが、魔導師には…？

左手「エゴ・アームズ：125口径アンフォーギヴン・バリスタ」
まるで大型警砲を思わせる外観の銃。撃てるのは魔力弾とアンビバ
レント・フレシエツト弾（矢の形をした精神力ケースに精神系通常
弾や対構造物徹甲弾が詰まっている。）スペシャルショット付。ス
ペシャルショットは相手の動きを一時的に止めるもの。だが、精神
力を多く磨り減らすため滅多なことがない限り使わない。

>説明<

精神系通常弾：体を傷付けず、精神のみにダメージを与える弾丸。
一兎は余り使わない。使わせない。

対構造物徹甲弾：人体以外の構造物にダメージを与える弾丸。かな
り重宝しそう…な予感。

《パラベラム》：精神的に障害があつたり傷があつたりする人があ
る銃剤によって目覚めた形の総称。手を精神力で形作った銃器に変
えられる。銃器を総称して《P・V・F》と呼び、展開すると「内
観還元力場」と呼ばれるフィールドによって飛躍的に身体能力が上
がる。

イド・アームズ：右手の銃器で、主に防御系。本能に近い意識から
生まれる。「トラウマ・シエル」と言うバリアを展開できる。口径
は小さめ。

エゴ・アームズ…左手の銃器で、主に大火力の主砲。利己的で現実的な意識から生まれる。スペシャルショットという特別な弾丸をもつ。口径は大きめ。

乾燥者 - デシケーター - …生まれながら《パラベラム》になっている者の総称。《パラベラム》より強力な力を持っている。

選択戦争 …乾燥者によって起こされた戦争。全世界の人々の無差別殺人。《パラベラム》も大量に殺されるが、一兔を取り込んだ「サード・プロメテウス・ファイア」により鎮静化。

無印編1幕「少年、転生」(前書き)

連投で、第一幕です!!

楽しんでいただけたらと思います!

無印編1幕「少年、転生」

『ごめんね、君に嘘をついた。』

> 選択戦争の最中、「ソード・プロメテウス・ファイア」の前で、
佐々木 一兔は目の前にいる少女、長谷川 志甫に呟いた。その顔
はまるであたかも自身の”死”を覚悟したかのように柔らかい笑み
だった……

志甫「…え？」

志甫は今まで一兔が『ソード・プロメテウス・ファイアを使っても
死なないよ』と言っていたことに喜び、戦争が終わった後の事に希
望を持っていた。

志甫は一兔が好きだ。人の辛さに敏感で、自分の辛さを上手く隠せ
て、優しく、暖かい。だから、戦争が終わったら一兔に告白する
つもりでいた。

志甫「いつ……と？そんな…ちょっと待ってよ！！やだよ！！そん
なの！！」

志甫は一兔の腕を掴もうとする。好きな人が死に行くのをみすみ
す見過ごしたりしない。

しかし……一兔は違った。

一兔は志甫の《P・V・F》にバリスタの精神系通常弾を撃ち込んだ。

《P・V・F》に撃ち込んだとしても、死んだりはしないが、全神経回路とつながっている分、痛みは激しい。

『ごめん、乱暴なことをして…でも、こうしなきゃ、俺を止めるでしょ?』

一兔は「サード・プロメテウス・ファイア」の施術台に乗った。

志甫は痛みを耐えながら必死に一兔に手を伸ばす。顔は涙が流れ、鼻水と涎が流れるまでに我を忘れていた。

志甫「一兔!! やだよ!! こんなもの!! やめてよ!! もうお別れみたいな顔してるのもわけわかんないよ!! バカ!! 死んじゃうなんて……そんなのやだよ!!」

『死なないよ。起きる見込みがないだけで。』

そして、施術はあと、一兔の精神をリンクさせるだけとなり…最後に志甫が……

志甫「私は……一兔のことが好きなんだ」

告白した。叶わない初恋の、最初で最後の告白を。

『良かった……』

俺も志甫を愛してるんだ。だから俺のことは忘れて、幸せになって。アイドルになって、生き残った人たちに歌を聞かせて上げて。戦争に疲れた世界は……
きつと……志甫の底抜けに明るい歌声が必要なはずだから……』

志甫「一兔………一兔おお……」

『じゃあね、さよなら。』

そして、一兔の不幸で、壮絶で、ちよっぴり楽しかった人生は、一兔が大人になることを許さずに幕引きとなった……

『はずなんだけござ、こじ、どじ……』

一兔は何故か、辺り一面真っ白な空間にいた。五体満足だし、呼吸もできるし……

『……《P・V・F》も発動できるし…なんなんだ？』

一兔の右手に光の粒子が飛び交い、フレームを形作り、完全にイド・アームズである自分の武器、「デンジャラス・ラビット」が展開された。

？「……これはまた物騒なものを持ち込んだな。お前は……」

急に後ろから声がして、後ろを振り向きざまにデンジャラス・ラビットを突き付けた。

『誰……だ？』

後ろには……金色にウェーブがかかったロングヘアで、天使の翼を持った女の子がいた。

女の子「まあまあ落ち着け少年！騒がなくてもきちんと説明するか

らの！」

女の子の口調は古風で、おしとやかな感じだった。

『なら……君は誰なんだ？』

女の子「私は”神様”じゃー！」

女の子の台詞を聞いた瞬間、一兎は迷わずデンジャラス・ラビットのレバーを「S・S」に切り替えた。
スペシャルショット

神様？「ち……ちよつと待たれ！！何を……」

『……過去に何かあったからそんなに痛々しい台詞を吐くように「待て待て待て！！激しく待て！！」……違うの？』

女の子の勢いに一兎は少し引きぎみになった。女の子は必死に一兎をなだめ、とりあえず一兎はデンジャラス・ラビットを解除し、女の子（神？）の話聞いた。

神様？「お主の人生は不幸過ぎるわ！！よって、お主を転生させ

「『やっぱりスペシャルショットで少し見てみようか?』 いやいや
真面目じゃからなこれでも!!!止めんか!!!」

一兎は少し寂しそうな目をした。神様?はその眼差しに負けず、続
ける。

神様?。「とりあえず、お前には転生してもらおうからの!それに伴っ
て、一応としての力は残しておくからの!」

『…なんで?』

神様?。「実はの……救って欲しいのじゃ。可愛そうな運命を辿って
しまう少女を」『君も人のこと言えないよね?』 要らんわたわけ!!

とにかく、救ってくれないかの……?この通りじゃ!!!」

神様?はその場で一兎に頭を下げた。一兎は慌てたが……ため息混じ
りに神様?に向き合った。

『はあ……わかったよ。何が出来るか分からないけど、やってみるぞ。』

それを聞いた神様？は少女特有の笑みを浮かべ、一兔に抱き付いた。

神様？「ほんとか！！！！ありがとうなのじゃ！！！！それではさっそく準備開始じゃ！！！！」

『あはは…（本当に神様か分からないけど、いつまでも割りきらない訳にもいかないか。）』

……「しばらくして」……

それから、神様？は一兔に様々な恩恵を授けた。

神様は無いに等しい胸を張って説明に入る。

神様？「まず、《パラベラム》の能力は残すが、その世界は魔法を使うでの……新しく”魔力弾”の薬莢を作れるようにしたぞい！あと、魔力がなければいけないから魔力を与えたぞい！大体……S+くらいかの？」

『……S+？』

神様？「魔力の強さの度合いを表すんじゃないよ。F、E、D…といったAからはAA、AAA等となり、最高がSからじゃ…！さらに、上のランクに近ければ+が、下に近ければ-が付くんじゃ！」

『……つまり、俺の魔力…？はSSに近いSってことか？』

神様？「そうじゃ…！」

一兔は顔をしかめた。そこまで強くていいのかな…
まあ、力が多くても動けなきゃ意味ないか…

一兔はどうか現状を受け止めた。

神様？「あと、そっちに付いていくユニゾンデバイスを紹介するぞい…！」

『…ユニゾン……デバイス？』

神様？「そうじゃ…！デバイスというのは俗にいう魔法使いの杖、ユニゾンは融合の意味じゃ…！」

『つまり、融合する事で能力を発揮する杖か……』

神様？「そうじゃー！！なんじゃ、頭の回転速いのう！！関心じゃ！
では紹介するぞい？」

…ユニゾンデバイスはお主を一番良く知っておる者のコピーじゃか
ら楽しいと思うぞえ？……来るがよい！！」

すると、真っ白な空間に魔方陣が現れ、そこから……

『……………』

志甫「……一兔！」

先ほど別れた、長谷川 志甫がいて、抱き付いてきた。つまり、彼
女が一兔のユニゾンデバイス……な訳であって……

志甫「一兔！一兔！」

『もしかして、一緒に住むのか！！？』

うむ！と言わんばかりに神様？は首を縦に振った。

神様？「必要なことは既に志甫にいられてあるからの！！」

志甫「私にお任せヨオ！一兔！」

…志甫は相変わらずらしい…

『な……ちょっと待てよ』『じゃ、行ってくるのじゃあ……！』『……
は？』

一兔は異様な浮遊感に襲われ、下を向けば……

空間にぽっかり黒い穴が空いていた訳で……

『ちょっと待てよオオオオオオオオオオオオ！！？？？』

志甫「一兔！？落ちるううう！！？」

もちろん、落ちていった。

神様？「……頼むぞい、佐々木 一兔。彼女等を……助けるのじゃ
！！」

神様？は真っ白な空間に空いた穴を見つめ、切に願っていた。

- 佐々木 一兔に、幸あれ!! -

無印編2幕「少年、到着そして転入」（前書き）

優氣凛々コーナー

優氣凛々「てなわけで作ってまいりました”疾走する”SS!!

今までやりたいと思っていたことを小説が完結したことをきっかけに出しました!!」

一兔「自分の？」

優氣凛々「……………」

まだまだ！まだ勝負はたゆたっている…！」

一兔「たゆたっていないたゆたっていない……………てか勝負ってなに？」

無印編2幕「少年、到着そして転入」

一兔と志甫は未だに落ちていた。暗いところを鑑みて恐らく夜なんだと一兔はチラリと思っただが……

『うわあああああああああああ！？』

今はそんなに余裕はなかった。今は落下をどうにかしなければ……！！

志甫「あはははははは！！一兔！落ちるよお！！落ちてるよお！」

『わかってるから！！』

志甫は笑っているように聞こえるが、顔は笑っていない。さすがに《パラベラム》であってもこんな高度は死んでしまう。

『…仕方ないなあ！！』

一兔は左手に精神を集中する。すると、空間に光の粒子が現れ、フレームを形作り左手に付いた。そしてそこに「エゴ・アームズ…1

25口径アンフォーギヴン・バリスタ」が現れた。
一兔は内観還元力場によって超人的な身体能力に加え…

『志甫！』

まるでそこに地面があるように蹴りあげた。一兔は空いている右手で志甫を抱き寄せる。

志甫「はわわ！？いつ…一兔！！／／／／」

『少し辛抱してくれよ………！！』

志甫は顔を赤らめながらもまんざらでも無さげに一兔にしがみついた。そしてふと…志甫が気付いた。

志甫「ねえ一兔！」

『何だよこんなときに！？』

志甫「一兔…ちっこくなくなってるお？」

『そうかいそう……か……い?』

一兔は自分の体を見た。

小さなて、肩幅が小さく、足も短い。さらに、服は何故か生前着ていた学ラン姿で、服のサイズがピッタリだった。

『はあああああああああ!?!?なんだこりゃ!?!?』

志甫「一兔、可愛いお! / / /」

一兔は志甫に褒められ、かなり恥ずかしい気持ちに駆られたが……地面が見えてきたところで我に返った。

『……っ!?!?!志甫! しっかり掴まってくれ!?! 手頃な木に当たって衝撃を押さえてみる!?!』

志甫「わかった!?!」

志甫がしっかり掴まったことを確認してから、アンフォークギヴン・バリスタの能力で大きな広葉樹の真上まで飛んだ。そして……

一兔と志甫は木に落下した。
その際、志甫は女の子のため、一兔が下になった。

『ぐう……！！！』

志甫「一兔！大丈夫！？」

『なんか……ね。アンフォーギヴン・バリスタに感謝しないと……』

『パラベラム』の能力によって身体能力が上昇してなかったらと思
うと……ぞっとする。まさに『P・V・F』さまさまである。

一応体は動くので、とりあえず志甫のナビのもとに下山した。

『……まさか、体が小さくなるとはね……』

志甫「でも……一兔可愛いお？高校生の時も私は良かったけど、改

めてみるとシヨタもありかも!？」

『……まあ、どうにかなるかな?それより志甫。』

志甫「ん?」

一兔は立ち止まって、志甫と目を合わせた。結果的に上目遣いになるのだが、そんなに気にしていない様子だった。

『……ごめん、俺…最後にあんなことをして…ひどいこと言って…
本当に俺にはああするしかなかったんだ。…コピーだとしても、志
甫は志甫なんだろう?だから…ごめん。』

志甫は笑顔で一兔に近づき、抱きしめた。

志甫「いいよ…今こうして一兔といられて、私は幸せだよ?
これからは一緒だよ?いーっと / / / / /」

『……ああ。 / / / / /』

「そつえば……両想いなんだよな / / /」と呟きながら一兔は頬

を掻いた。志甫も一兔から離れ、顔を赤らめながらうつむいた。

志甫「か…神様？から家を与えられてたお？行く、一兔！！」

『そうなんだ。わかった、行こう！志甫！』

一兔と志甫は手を繋ぎながら、神様？が用意したであろう家に向かった。

着いてみると、なかなかいい感じの一戸建てだ。更には、《P・V・F》を撃つても音が外に漏れ出さない練習場まであり、まさに至れり尽くせりである。

そんななか、リビングで…

志甫「一兔！リビングの机に、こんなん見つけたお！！」

『なに？……封筒と手紙か…とりあえず手紙を読んでみようか。』

一兔と志甫はリビングのテーブルに腰掛けた。そして、一兔が手紙を読むことになった。

『…はあ…』とまあこれくらいかの？制服はクローゼットの中じゃあ、野菜とかは冷蔵庫に入ってるぞい！でわでわ……

若いからって子作りするなよ」

最後は余計だ！！！！／／／／／／／／／／／／

神様の手紙を読んだ一兎はこれでもかと言わんばかりに手紙を破った。恥ずかしさが怒りか分からないが、きれいに頬が赤い。

志甫は最後の言葉に少し恥じらいを残しつつ、一兎に近づいていった。

志甫「いっ」と！！今日はもう疲れたし、夜も遅いから寝るにやあ」

一兎はリビングにあつた壁掛け時計に目をやる。時刻はの深夜1時。良い子の寝る時間をとっくに過ぎている。

『そうだね。さっき部屋の確認してきたし、寝ようか。明日のことは明日考えようか。』

志甫「うん……一兎？」

『ん？どうした志甫？』

志甫はうつむきながらもじもじしていた。顔も赤い。

志甫「い…………一緒に…………寝よう？今は…………今日は一兎と…………離れたくない…………から…………」

志甫はまた一兎が居なくなってしまうのではと不安だった。一兎は死ぬ間際、自分がしたことを思いだし…

『うん……………わかった。／／／／／』

その日、一兎は志甫と一緒に眠りについた。一兎はアンフォーギヴン・バリスタを使ったからか、すぐに寝入った。志甫は…

志甫「一兎…………おやすみ。／／／／／…………ん…………／／／／／」

寝入った一兎の唇と自身の唇を重ね、眠りについた。

.....「朝」.....

『…よし。』

朝、一兔は制服に着替えた。転入届けによれば、転入先は”聖祥大
学附属小学校”なるところで、志甫から聞いた話によると、小学校
から大学までエスカレーター式に上がれるらしい。すごいを通り越
している。

制服は、セーラー調の上にハーフパンツだ。

志甫は容姿が変わっていないため、家に残ることに。

『んじゃ、いつてくるよ!!..!』

志甫「わかった、気をつけてね?.....今思えば、これじゃ...新婚
さんみたいだね...?../../../../」

『!!!!../../../../い...行つてきます!!!!../../../../』

一兔はいたたまれなくなり、急いで家を後にした。

志甫「ああ！行ってきますのキスはあ！？」

…志甫は一人、家で嘆いていた。

〈学校内〉

先生「じゃあ、ここで待っててね？」

そういつて先生は教室に入って行った。待ってる間、一兔の頭の中には志甫の「新婚さんみたいだね」がリピートされていた。

『（全く……朝から心臓に悪い…何であんなことが平然と……）』

一兔も別に意識していない訳ではない。ただ、今自分は子供だから少し戸惑いがあるのだ。

考えてる間に、先生が教室から声をあげる。

先生「入っても良いわよ」

一兔は、少し緊張しながらも、扉にてをかけ…

『失礼します!』

教室の敷居を跨いだ。

無印編2幕「少年、到着そして転入」(後書き)

優氣凛々「志甫は後々紹介します!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2127ba/>

疾走する魔法少女なパラバラム-不幸少年奮闘記-

2012年1月6日06時48分発行